

差別や偏見をなくすために...

ハンセン病問題を考える尼崎市民の会 山本 育子

「ハンセン病問題を考える尼崎市民の会」(以下市民の会)は2003年に有志が集まって立ち上げたささやかな市民の会です。約65名の会員と12名の世話人によって活動しています。

特別養護老人ホーム園田苑で月一回開く世話人会が主体となって、市民啓発のための講演会・映画会の開催、市民の会ニュースの発行、国立療養所訪問ツアー一催行、ハンセン病関係の書籍購入など多岐にわたって活動しています。

2021年度より市と共催して、市内各地区で「麦ばあ島」(ハンセン病に罹った麦ばあを主人公にした漫画)のパネル展と講演会も行い、市との連携を強化しています。

今後もダイバーシティ推進課とも連携し、共にハンセン病に関わる課題に取り組んでいきたいと思ひます。

姉妹がつくるつながり... 人権作文と自由研究

黄光男さんは立ち上げ当初からの世話人の一人で、市民の会にとっては大きな力です。また、その黄さんとのつながりから、三山絢子さん・由依さん姉妹との出会いがありました。

絢子さん・由依さん姉妹は、幼いころよりご両親やその仲間たちと毎年国立療養所長島愛生園を訪れ、入所者さんたちと親しく接してこられました。そして、そのかけがえのない経験から得た思いを、人権作文や夏休みの自由研究として著されました。

らい予防法廃止より30年近い時が経った今もなお残る差別や偏見をなくすには、学習や正しい知識の習得だけでなく、当事者に会って直接話をし、ふれあいを重ねて理解を深めることが大切ではないかと思ひます。絢子さん・由依さん姉妹はまさにそのことを体現して、私たちにその姿を見せてくれています。

お二人の作品が皆さんの心に何かを投げかけてくれればと願っています。

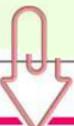
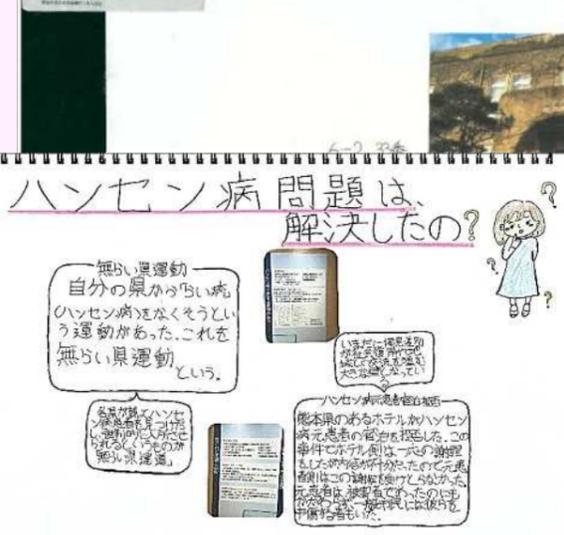
妹・由依さんの夏休み自由研究 (小学校6年生当時)

スケッチブック21ページに「ハンセン病との出会い」「ハンセン病とは」「薬で治る病気」「偏見と差別」「愛生園について」「ハンセン病問題は解決したの?」「盲動鈴・大風子油、入所者さんが使っていた道具、園内通貨」「愛生園の全景と施設の説明」「全国のハンセン病療養所」「まとめ」「黄光男さんと私」などの項目別にまとめられています。(一部抜粋してご紹介します。)

ハンセン病との出会い

2歳の時から家族で国立療養所長島愛生園という所に行っていた。父の知り合いであるハンセン病患者の家族に誘われたのがきっかけだった。小さい頃は、そこがどういう場所なのか、あまり理解できなかったが、今まで何回も訪問した中でだんだんと分かるようになってきた。

ここには、かつてハンセン病になって入所していた回復者の力かけられる。元患者さんの話を聞いたり、お話を交わす機会があった。また愛生園の中の史跡をめぐったり、歴史資料館にも足を運んだ。そして、ハンセン病をめぐり問題について学んでいる。



姉・絢子さんの人権作文 (中学校1年生当時)

閉じこめられた命

「ちっこい手が来たな」

私はこの言葉が大好きでした。

社会で誤解されてきたハンセン病。感染力が非常に弱いにも関わらず、伝染病・遺伝病と恐れられ、「とても「怖い病気」と誤った認識を植え付けられてきました。薬で治るはずなのに患者を島などに隔離したそうです。

岡山県にあるハンセン病療養施設・長島愛生園で私は多くの人と出会いました。とても心に残っているのが、回復者の方と握手をしたときの事です。「本当に指がない人がいるんだ」と驚いたのを覚えています。また別の時にはハンセン病の影響で目が見えなくなった方と会いました。「ちっこい手が来たな」と喜んでくれたときは嬉しくて、次に会うのを心待ちにしていました。でも、その方も、私が出た一週間後に亡くなったと聞き、また会えなかったのに、と悲しくなりました。

また、十三歳の頃に連れてこられ、七十年以上愛生園で暮らしている人もいます。普通の生活が奪われた人がいるんだと改めてしりました。

私が驚いたのは、この病気で苦しんだのは患者さんだけではなくてその家族も、ということです。ハンセン病患者だと分かると療養所へ連れて行かれ、残されて子どもは「身内が病気」というだけで学校で差別やいじめを受けたり、仕事をクビになったり、結婚できなかつたりすることがあったそうです。だから、「隔離さないといけないことなんだ」と思ってきた人たちがいます。

親がハンセン病患者だった黄光男(ファンガンナム)さんは一歳の時に孤児院に入り、九歳の時、やっと家族と一緒に住めるようになったそうです。しかし、自分と同じように親のいない子たちと暮らしていたのに、いきなり親と名乗る人と過ごすことは辛かったと黄さんは言います。一緒に暮らせることになっても複雑な気持ちを抱えることになったそうです。私はもし自分だったら...と考えるだけで苦しくなります。黄さんの想いはそれ以上だったはず。

今ハンセン病による差別は表面的にはなくなったように見えます。でも本当に、ハンセン病問題は解決したのでしょうか。私がそう疑問に思う理由は、愛生園にある納骨堂の話を知ったからです。そこには引き取り手がなく、亡くなってもお墓へ帰らなかった人たちの遺骨が納められています。なぜ誰も引き取らなかったのか。それはその家族が周りからどう見られるか、差別を受けるのではないかと不安な思いがあったからだと言ひます。世の中では、ハンセン病に関する偏見が今もお根強く残っていると感じます。生きている間に「閉じこめられた命」は、死んだあとも閉じこめられたままです。

私は、生きている人はもちろん、亡くなられた方も自分の帰るべきところに帰してあげたいと思ひました。しかし、現在入所者の平均年齢は八十五歳です。身内もなくなつたり、引き取りを拒まれたり、一生を施設で過ごさなければならなくなりました。

「とても怖い病気」と恐れられてきたハンセン病。治っても島からは出られず、入所者の自由を奪って来ました。長島愛生園には人間としての当たり前の権利を取り戻すという思いが込められた「人間回復の橋」があります。かつて愛生園に渡るには渡し船で島へ行くしかありませんでした。隔離政策がなくなつても入所者の方は自由に行き来することができなかつたそうです。この橋はハンセン病療養所と社会を一本の道でつないでいます。

私がハンセン病について学んで考えたことは、自分が信じている情報が必ずしも正しいものではなく、それが誰かを苦しめているかもしれないということです。自分の誤った思い込みで誰かを傷つけることがないように、真実を見極める力を身につけたいです。そして誰もが差別されないような社会を実現したいです。

人権はみんなのものなのだから。



まとめ

ハンセン病についての偏見や差別の問題を知りたく調べたい思ひました。長島愛生園では、歴史博物館で学芸員さんのお話や実際に元患者さんにお会いして、お話を聞いたりしました。一番心に残っているのは、回復者の方とお話した時です。病気の後遺症で、手が変わっていたからです。会いに行きたら、よるこでもりえたのがうれしかったです。療養所では、現在入所者さんの平均年齢は88才。私がお会した方も亡くなってしまいました。国の政策が人々の誤解をひどくしたと思ひます。なぜ人生の大半を療養所で過ごすなければならなかつたかを考えたらハンセン病の問題は解決したとは思いません。

▲ 愛生園の全景と施設の説明 ▶